

岡 遺 跡 群

上 辻 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター

岡 遺 跡 群

上 辻 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて実施した、平成17年度岡地区代替グラウンド造成事業に伴う上辻遺跡の発掘調査報告書です。

上辻遺跡の所在する大分市岡地区は大野川下流右岸の丹生台地に位置しており、周辺には旧石器時代の丹生遺跡群、弥生時代の丹生川遺跡・清水迫平形銅剣出土地、古墳時代では野間古墳群などが所在しています。また丹生・一木の内陸工業用地開発に伴う岡遺跡群の発掘調査によって弥生時代・古墳時代を中心とする住居跡や古墳が発見されています。

今回調査した上辻遺跡は、狭い調査範囲でしたが、弥生時代後期の竪穴住居跡・甕棺墓・木棺墓等の遺構や土器・鉄器・木器等の遺物が確認され、当時における人々の生活の跡をみることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長

小 玉 学 司

例 言

- 1 本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部からの依頼をうけて調査を行った岡地区代替グラウンド造成工事に係る上辻遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺物の水洗・復元・実測・トレースなどの整理作業は大分県教育庁文化課資料室で行ったが、石器については九州文化財研究所に委託した。
- 3 鉄器のX線撮影について大分県立歴史博物館の御協力を得た。
- 4 遺跡・遺物写真は各調査担当が撮影した他、一部撮影委託をした。
- 5 遺物・写真・実測図等は大分県教育庁文化課資料室で保管している。
- 6 写真番号は遺物の挿図番号と同じである。なお、空中写真については九州航空に委託した。
- 7 本書の執筆・編集は綿貫俊一が行ったが、第4章は小柳和宏（教育庁埋蔵文化財センター）による。本書に用いた方位は真北である。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 遺構と遺物	6
SH1	6
SH2	10
SH3	11
SH4	12
SH5	12
SH6	13
SH7	13
SH8	15
SH9	16
SH10	19
SH11	21
SH12	22
SH13	23
SH14	23
SH15	23
甕棺墓	26
SD1	27
SK1	29
石器類	31
鉄器類	32
第4章 まとめ	36
挿図目次	
第1図 上辻遺跡と周辺の遺跡	3
第2図 上辻遺跡の発掘調査区 位置図	4
第3図 上辻遺跡の遺構配置図 ・遺物分布図	5

第4図 SH1実測図	6
第5図 SH1出土土器実測図(1)	7
第6図 SH1出土土器実測図(2)	8
第7図 SH2実測図	9
第8図 SH2出土土器実測図	10
第9図 SH3実測図	12
第10図 SH4・SH6実測図	12
第11図 SH5・SH8実測図	13
第12図 SH3・SH4・SH5・SH6・ SH7・SH8出土土器実測図	14
第13図 SH17・SH13実測図	15
第14図 SH9実測図	16
第15図 SH9出土土器実測図	17
第16図 SH10実測図	19
第17図 SH10出土土器実測図	20
第18図 SH11実測図	21
第19図 SH12実測図	22
第20図 SH13実測図	22
第21図 SH14実測図	23
第22図 SH15実測図	24
第23図 SH11・SH14・SH15出土土器実測図	25
第24図 甕棺墓実測図	26
第25図 SD1実測図	27
第26図 甕棺実測図(土器)	28
第27図 鹿棄土器分布図	28
第28図 包含層出土土器実測図	29
第29図 包含層出土土器実測図	30
第30図 SK1実測図	30
第31図 鉄器・砥石実測図	31
第32図 石器・鉄器実測図	32
第33図 砥石・石器実測図	32
第34図 石器実測図	33
第35図 石器実測図	34
第36図 岡遺跡群弥生土器編年図	37

第1章 調査の経過

1. 調査に至る経過

大分県の政治・経済の中心地である大分市は人口45万人を数え、中核都市として大きく変貌しつつある。そうした背景の中で、企業の立地が推進されてきた。近年、大分市東部の岡地区にもキャンノンが進出し、既に操業を開始している。キャンノンの新規設備投資計画に伴って大分県土地開発公社による岡団地造成事業が平成17年度事業として岡地区に計画され、これに伴う発掘調査が実施されている。この結果、旧石器時代から古墳時代までの遺構・遺物が見つまっている。

大分県土地開発の岡団地造成事業に伴って、事業予定地内にあったグラウンドも移転することになり、南側の道路を挟む対面にあたる大字丹生字上辻が代替グラウンド予定地となった。この付近は南接する清水ヶ池遺跡で平形銅剣が見つまっていることや、近隣の岡団地造成事業予定地で多くの埋蔵文化財が発掘されている。このため大分県土木建築部建設政策課・同建築住宅課から平成17年8月10日付け試掘依頼の協議を受け、大分県教育庁埋蔵文化財センターでは平成17年8月24日に試掘を行った。試掘調査では弥生時代の住居址3棟と、遺物出土地点がみられた。試掘結果を受けて、大分県教育庁埋蔵文化財センターと関係部局で検討を重ねた結果、この地点が造成工事によって大きく削りとられることが明らかになった。この結果から本調査が必要となり、平成17年11月1日から調査を開始し、平成17年12月27日に終了した。

2 発掘調査の組織

事業主体者 大分県土木建築部 建築住宅課
調査主体者 大分県教育庁埋蔵文化財センター

調査体制

発掘調査責任者	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長		渋谷 忠章
総務担当者	〃	次長兼総務課長	益 永 孝 則
発掘調査調整	〃	調査第一課長	栗田 勝 弘
	〃	調査第一課主幹	高橋 信 武
発掘調査担当者	〃	調査第一課副主幹	綿 貫 俊 一
	〃	調査第一課嘱託	谷 尊 祥

第2章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置及び地理的環境

遺跡は大分県大分市大字丹生上辻に所在する。

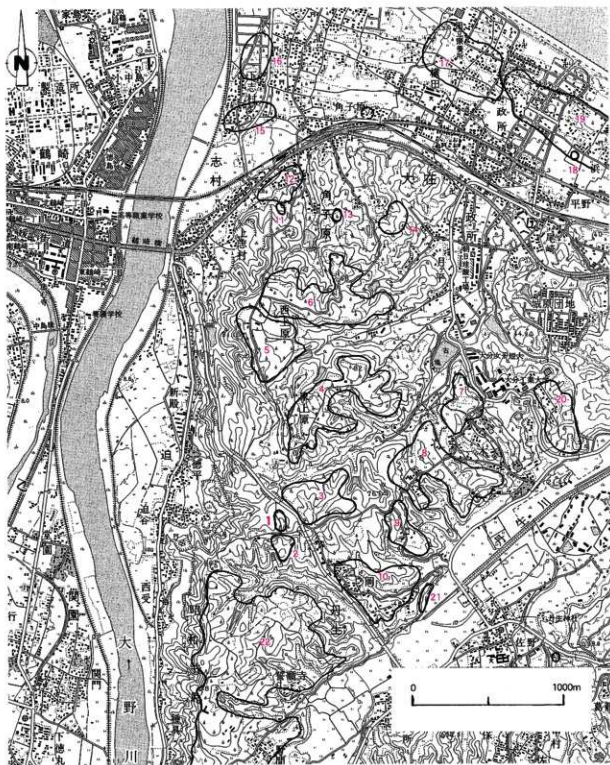
上辻遺跡の所在する大分市は大分県の東部にあって、別府湾や伊予灘に對面する位置にある。西部・南部の山地方面から大分川や大野川が東流し海へ至るが、その下流地帯にあたる。こうした下流域にあって、西側の大野川と東側の丹生川に挟まれた段丘は丹生台地と呼ばれ、南北5,500m、東西幅（最大幅）2,000mの規模を有する。大野川に對面する台地の西側は比高が約70m前後もある急傾斜面となっている。東側は階段状に河岸段丘が連続して丹生川沿いの低地に至る緩やかな勾配である。北側もやや急な崖地形であり、崖下は海岸段丘、数条の砂丘地帯となり海へ続く。南側は台地の幅が細く尾根状となり山地へ続く。

2 遺跡周辺の歴史的環境

遺跡は大字丹生に所在するが、この丹生及び大字丹川付近は、かつて「前期旧石器」が出土したとして全国的な注目と議論を呼んだ丹生遺跡群が分布している。この丹生遺跡群の調査は数年に亘ったが、「前期旧石器」の良好な出土層は掴めていない。1991年に正式報告書が発行されたが、多数の礫器や斧形石器は縄文時代草創期・早期で、そのほかの石器類は旧石器時代後期に含まれるものであった。近年、大分市教育委員会文化財課によって丹生1B北地点が長迫遺跡として再調査された。その結果、かつて包含層とされていた層位から縄文時代早期の土器片や草創期の斧形石器が出土している。

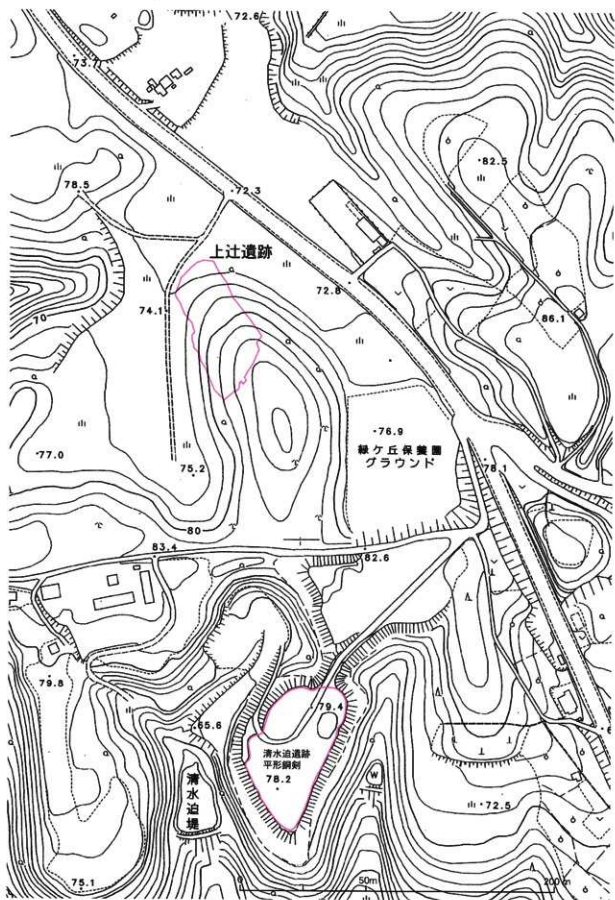
縄文時代の遺跡としては丹生台地周辺には見るべき遺跡や調査事例はない。ところが弥生時代早期になると、丹生台地の北方に位置する大在地域の低地に浜長牟田遺跡が営まれている。突帯紋土器の埋甕や、膨大な香川県金山産サヌカイトが見つかった。弥生時代前期においても引き続き下志村遺跡が営まれ、大型の貯蔵穴が見つかった。弥生時代中期の遺跡としては、丹生川遺跡から下城土器や木器が見つかった。このあたりの低地が水田耕作地であったことを窺わせている。弥生時代後期から古墳時代の遺跡としては大在地域の低地に浜遺跡があり、祭祀土器や墓、細形銅剣が見つかった。上辻遺跡に北東に隣接する岡遺跡から弥生時代後期の集落址、清水ヶ迫遺跡からは平形銅剣が見つかった。上辻遺跡からみて東方の丹生川沿いの低地では、かつて丹生川遺跡が調査され、矢板を含む水田遺構、木器など弥生時代中期初頭の遺構・遺物が出土している。丹生川沿いの地形は緩やかな斜面であることと、川からの比高も高くなく、上辻遺跡の頃においても重要な水田地帯であったと推定される。

古墳時代になると岡遺跡内には5世紀前半に埋葬された岡一号・二号古墳が存在しているし、上辻遺跡の南約1kmの高位段丘上には前方後円墳を含む野間古墳群が位置している（第1図）。

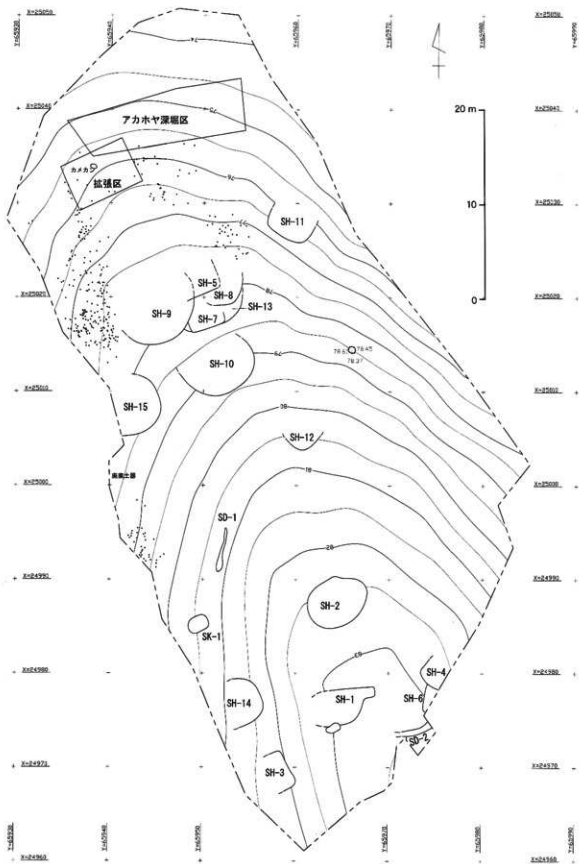


第1図 上辻遺跡と周辺の遺跡

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|-------------|
| 1 上辻遺跡 | 6 西上ノ原北遺跡 | 11 屋宗横穴墓群 | 16 天満宮裏遺跡 |
| 2 清水迫遺跡 | 7 経蔵原遺跡 | 12 王越遺跡 | 17 政所遺跡 |
| 3 岡遺跡 | 8 一木遺跡 | 13 王越石棺 | 18 浜遺跡銅剣出土地 |
| 4 東上原遺跡 | 9 善福寺遺跡 | 14 角子原遺跡 | 19 浜遺跡 |
| 5 上ノ原北遺跡 | 10 下遺跡 | 15 下志村遺跡 | |



第2図 上辻遺跡発掘調査区位置図



第3図 上辻遺跡の遺構配置図・遺物分布図

第3章 遺構と遺物

SH1(第4図)

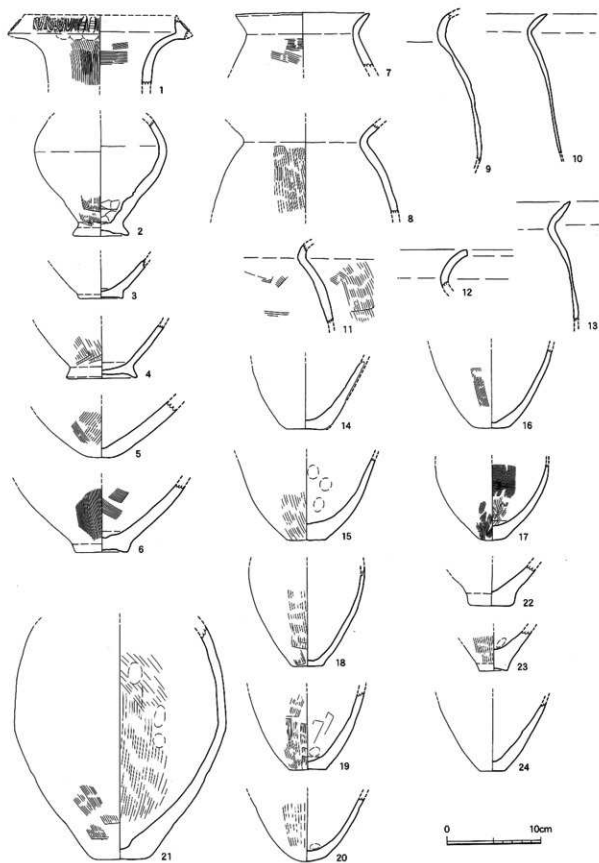
SH1は南北に長い調査区の南部尾根部の平坦地に位置する。ここは標高33m前後のところにあたる(第3図)。遺構は東西に長く歪な形である。調査時には遺構の北辺を中心として直線的な遺構ラインが検出されたが、東辺と南辺は湾曲し、その解釈に苦慮した。また遺構の西半部は山道部分で削平されていたが、遺構の最下部が部分的に残存していた。東辺と南辺の湾曲部は、ベッド状遺構の肩部であるのか、明確ではない。上部が削られ、本来の遺構景観を残していないのであろう。

遺物(第5・6図)

遺物は本遺跡の遺構のなかでは最も多く出土したが異常に壘の底部が多く目立った。おそらく廃棄した土器であらう。数時期の遺物が混在している。



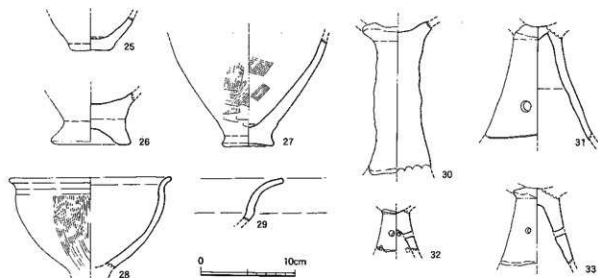
第4図 SH1実測図



第5圖 SH1出土土器実測圖(1)

第1表 SH1の遺物観察表(1)

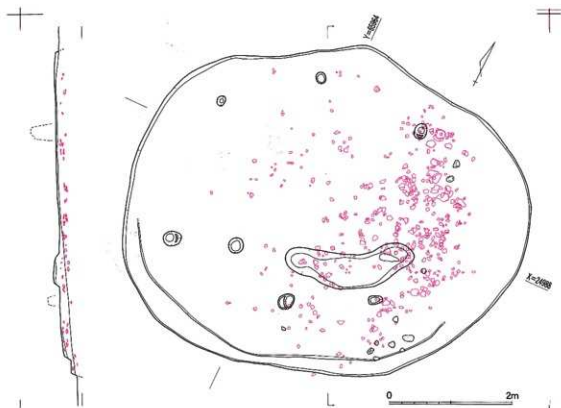
図	遺物番号	時代	部面調整					法量(cm)			遺存率	備考		
			口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口径	最大径	底径				
1	SH1.212	弥生 壺	不明	縦突帯、帯面紋	横ハケ	縦ハケ							口縁・胴部	
2	SH1.102-142-233	弥生 壺			ナデ	ナデ、下部に縦ハケ			14.50	6.00			胴部底部	
3	SH1.324	弥生 壺			ナデ	ハケ	ナデ				4.70		胴部底部	
4	SH1.241	弥生 壺			ナデ	ナデ、下部に縦ハケ					7.70		胴部底部	
5	SH1.240	弥生 壺			ナデ	ナデ、下部に縦ハケ	ナデ				3.00		胴部底部	
6	SH1.179	弥生 壺			ナデ後、ハケ	縦ハケ	ナデ				5.60		胴部底部	
7	SH1.44	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	ナデ	横ハケ							口縁・胴部	
8	SH1.176	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	縦ハケ	ナデ							口縁・胴部	
9	SH1.340	弥生 壺											口縁・胴部	
10	SH1.	弥生 壺											口縁・胴部	
11	SH1.219	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	斜行ハケ	縦ハケ							口縁	
12	SH1.170	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	ナデ								口縁・胴部	
13	SH1.	弥生 壺											口縁・胴部	
14	SH1.37	弥生 壺			ナデ								胴部底部	
15	SH1.	弥生 壺			ナデ	縦ハケ					4.20		胴部底部	
16	SH1.197	弥生 壺			ナデ	ナデ、一部縦ハケ					3.20		胴部底部	
17	SH1.	弥生 壺			横ハケ	底部付近縦ハケ	ナデ				2.50		胴部底部	
18	SH1.	弥生 壺			ナデ	縦ハケ後ナデ					3.20		胴部底部	
19	SH1.50	弥生 壺			横ナデ後、板工具痕	縦ハケ					4.00		胴部底部	
20	SH1.231	弥生 壺			ナデ	縦ハケ					丸底		胴部底部	



第6図 SH1出土土器実測図(2)

第2表 SH1の遺物観察表(2)

標 図	遺物番号	時 代	器 種	器 面 調 整					法量(cm)			遺存率	備考	
				口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口径	最大脚部	底径			
21	SH1.196	弥生	甕			不定方向ハケ	ナデ、下部に縦ハケ痕			23.30	5.50		胴部底部	長胴甕
22	SH1.344	弥生	甕			ナデ	ナデ	ナデ			4.20		胴部底部	
23	SH1.76	弥生	甕			ナデ	ナデ、一部縦ハケ	ナデ			3.00		胴部底部	
24	SH1.	弥生	甕			ナデ	ナデ				2.60		胴部底部	
25	SH1.300	弥生	甕			ナデ					4.00			
26	SH1.117	弥生	甕			ナデ	指ナデ	指ナデ			9.10			
27	SH1.281	弥生	甕			ナデ後、ハケ	ナデ後、ハケ	ナデ			6.00		胴部底部	
28	SH1.184	弥生	台付鉢	横ナデ	横ナデ	ナデ	縦ハケ		17.40	16.50			口縁部・胴部	
29	SH1.	弥生	高坏			横ナデ	横ナデ						坏部	
30	SH1.3	弥生	高坏										脚部	
31	SH1.75	弥生	高坏			ナデ	ナデ						脚部	穿孔あり
32	SH1.	弥生	高坏			ナデ	ナデ						脚部	穿孔あり
33	SH1.	弥生	高坏			ナデ	ナデ						脚部	穿孔あり



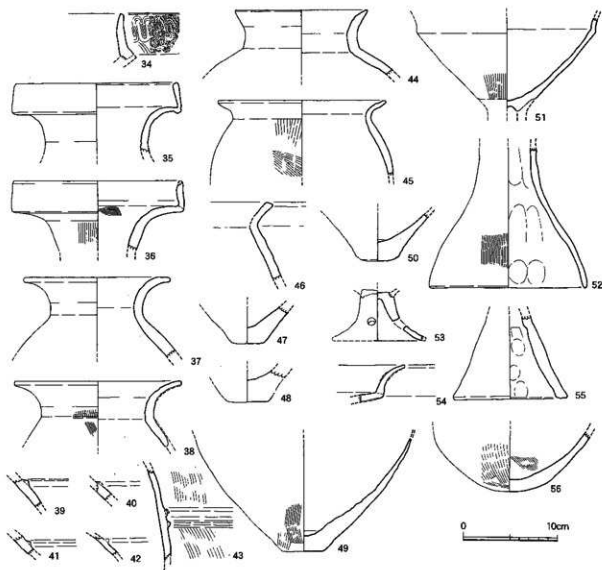
第7図 SH2実測図

SH2(第7図)

SH2は南北に長い調査区のなかでは南部の尾根部の平坦地に位置する。ここは標高82.50m前後のところにあたる(第3図)。遺構は東西にやや長い楕円形を呈している。これは住居の建て替えに伴うものである。住居址の大きさは長軸663cm、短軸544cmで、深さが現況で17cmである。住居址の南側壁付近の外側に古い遺構ラインがある。主柱穴は明確なもので6本からなる。住居址の南半部に浅い溝状の掘り込みがある。

遺物(第8図)

遺物は住居址の東半部にまとまって見つかっているが、残りの悪い西半部はまばらな分布である。34は柳掻き文のある二重口縁壺。35・36は無文の二重口縁壺。45は球形の胴部で、頸部から口縁部を丸く屈曲させている。53は脚部の短い台付鉢の脚部である。52は外面が縦ハケ、内面は指ナデで仕上げている。裾部がやや膨らむ撥形の器形を呈している。



第8図 SH2出土土器実測図

第3表 SH2の遺物観察表

採 取 遺 物 番 号	時 代	器 面 調 整					注量(cm)			透 存 率	備 考 長 割 壁	
		口縁部内面	口縁部外面	胴・(脚)部内面	胴・(脚)部外面	底部外面	口径	最大胴径	底径			
34	SH-2.120	弥生 壺	ナデ	ナデ、巻縁き遺紋							口縁部	
35	SH-2.121	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ		17.50			口縁部	底付着
36	SH-2.273	弥生 壺	横ナデ頸部 不定ハケ	横ナデ頸部縦 ハケ				18.60			口縁部	4分1
37	SH-2.186	弥生 壺			ナデ	ナデ		15.80			口縁部・胴部	
38	SH-2.272	弥生 壺	ナデ	縦ハケ	ナデ	縦ハケか		17.80			口縁部・胴部	
39	SH-2	弥生 壺			ナデ	ナデ、突帯					胴部	
40	SH-2.177	弥生 壺			ナデ	ナデ、突帯					胴部	
41	SH-2	弥生 壺			ナデ	ナデ、突帯					胴部	
42	SH-2	弥生 壺			ナデ	ナデ、突帯					胴部	
43	SH-2.254	弥生 壺			ナデ	縦ハケ、突帯					胴部	
44	SH-2.144	弥生 壺						14.20			口縁部胴部	
45	SH-2.163	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	ナデ	縦ハケ、斜行ハケ		18.10	19.60		口縁部胴部	
46	SH-2.256	弥生 壺	横ナデ	横ナデ							口縁部胴部	
47	SH-2	弥生 壺			ナデ	ナデ			3.50			
48	SH-2	弥生 壺			ナデ	ナデ			4.30		底部	
49	SH-2.262	弥生 壺				下半に縦ハケ			4.30		胴・底部	
50	SH-2.215	弥生 壺			ナデ				3.70		胴・底部	
51	SH-2.122	弥生 高杯	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ後、一部縦 ハケ		19.20			坏部	
52	SH-2.262	弥生 高杯			指ナデ	縦ハケか			17.00		胴部	
53	SH-2.270	弥生 台付 鉢			ナデ	ナデ			10.10		胴部	穿孔あり
54	SH-2.231	弥生 高杯	ナデ		ナデ						口縁部	
55	SH-2.210	弥生 高杯			指ナデ	ナデ			12.20		胴部4分1	
56	SH-2.216	弥生 壺			斜行ハケ、ナデ	ナデ後、縦ハケ			丸底		底部	底面彫形

SH3(第9図)

SH3は南北に長い調査区のなかでは南部の尾根部西側斜面に位置する。ここは標高82m前後のところにあたる(第3図)。遺構は勾配のきつい斜面にあるために残りに残りが極めて悪い。等高線に平行するラインと、これに直角に屈折するラインが部分的に検出されたことから方形を基調とした住居址と考えられる。等高線に平行する東壁は425cmで、直下の深さ15cm前後である。

遺物(第12図57~61)

57は口縁部が肥厚する甕の破片。59は高杯の坏部破片で、段を有する。外面をハケとミガキで調整する。60と61は同様な土器の底部破片であり、底部が平底となる。60の内面は板工具によるナデ仕上げである。

SH4(第10図)

SH4は南北に長い調査区のなかでは南部の尾根部最高所の東側にあり、平坦部から斜面に移行しつつある部分にあたる。やや斜面である。標高82.70cm前後のところにあたる(第3図)。遺構の北側は斜面のためもあり、流出し、南側は調査区外の為もあって全体の景観は明確ではない。湾曲するラインが検出されたことから円形に近い方形の住居址と考えられる。検出面からの深さ5~10cmである。主柱穴は明確ではなかった。

遺物(第12図62~66)

62は頸部から丸く外方へ屈曲させる甕で、外面の調整は不明。内面は斜行するハケである。

63は胴部と口縁部間の境界が不明瞭な甕である。

SH5(第10図)

SH5は南北に長い調査区のなかでは北部の尾根部斜面中腹に平坦部を造作した部分にあたる(第3図)。遺構の西側はSH9を切る関係にあるが、斜面のためもあり、流出し、南側は調査区外の為もあって全体の景観は明確ではない。屈曲するラインが検出されたことから方形を基調とした住居址と考えられる。検出面からの深さ5~10cmである。

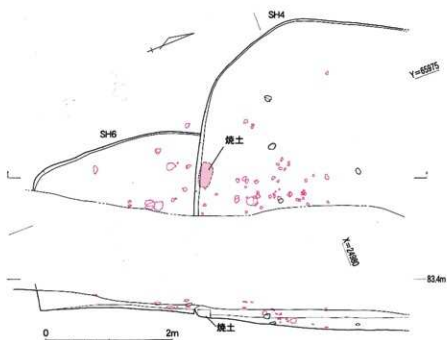
主柱穴の構成発掘は明確ではないが、一箇所だけ主柱穴と思われる穴を確認した。なお、遺構の東壁に近い部分に地床炉と思われる被熱した床面がある。

遺物(第12図67.68)

甕の口縁部破片と高杯の破片がある。



第9図 SH3実測図



第10図 SH4・SH6実測図

SH6(第10図)

SH6は南北に長い調査区のなかでは南部の尾根部最高所の東側にあり、平坦部から斜面に移行しつつある部分にあたる。やや斜面である。標高82.70cm前後のところにあたる(第3図)。遺構の北側は斜面のためもあり、流出し、南側は調査区外の為とSH4に切れ、全体の景観は明確ではない。湾曲するラインが検出されたことから円形を基調とした住居址と考えられる。検出面からの深さ25cmである。支柱穴は明確ではなかった。

遺物(第12図69～70)

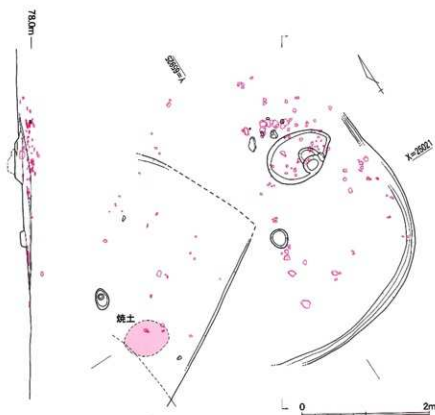
69は甕の底部破片で、内外面ナデで、底部が上げ底。70は胴長に立ち上がり、口縁部との境界が明瞭ではない甕で、緩やかに口縁部が外半する。口縁部は横ナデ、胴部の内外面ともナデ仕上げ。

SH7(第13図)

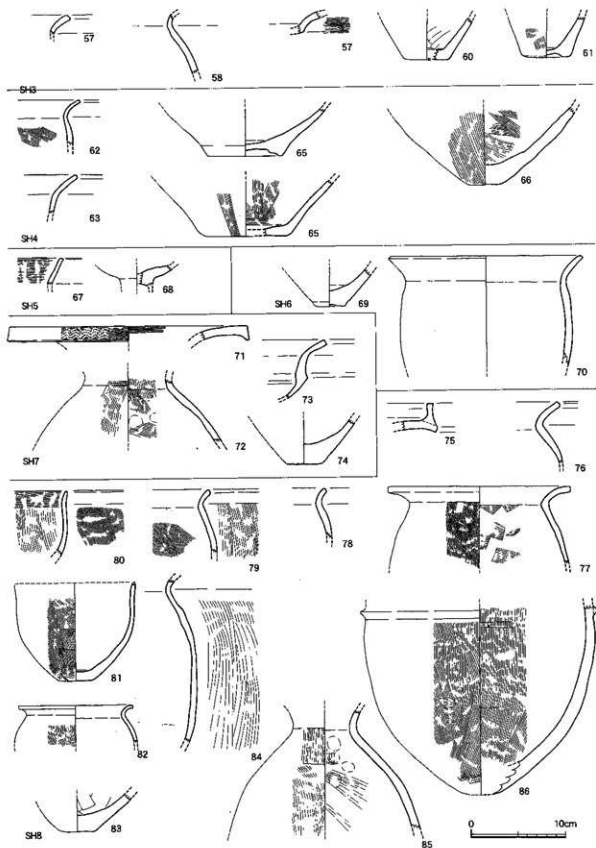
SH7は南北に長い調査区のなかでは北部の尾根部斜面中腹に平坦部を造作した部分にある。標高78.50m前後のところにあたる(第3図)。遺構の北・西北側はSH8とSH9に切られる関係にあるが、斜面のためもあり、流出した為もあって全体の景観は明確ではない。屈曲するラインが検出されたことから方形を基調とした住居址と考えられる。検出面からの深さ5～10cmである。支柱穴の構成は明確ではない。

遺物(第12図71～74)

71はアサガオ形に開く器台と思われる。口縁部外面に櫛描き波状文がある。



第11図 SH5・SH8 実測図



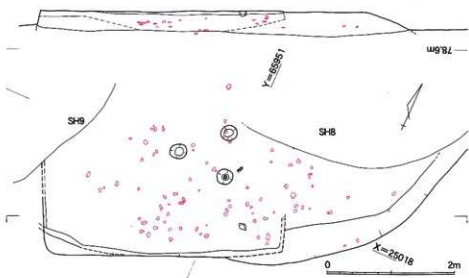
第12图 SH3·SH4·SH5·SH6·SH7·SH8出土土器实测图

SH8(第13図)

SH8は南北に長い調査区のなかでは北部の尾根部斜面中腹に平坦部を造作した部分にある。標高78m前後のところにあたる(第3図)。遺構の西半分はSH5に切られる関係にあるが、斜面のためもあり、流出し、住居址の景観は明確ではない。曲線ラインと壁周溝が検出されたことから円形を基調とした住居址と考えられる。検出面からの深さ数cmである。主柱穴の構成は明確ではないが、二箇所の柱穴と思われる穴を確認した。なお、遺構の北半部に楕円形の土坑が検出している。

遺物(第12図75~86)

75は壺か器台の口縁部破片か。横ナデとナデ仕上げ。82は甕で、球形の胴部。口縁部を外方に曲げる。



第13図 SH7・SH13実測図

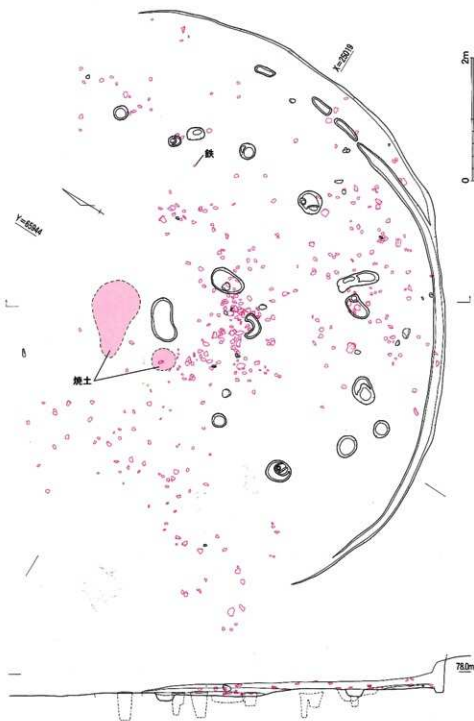
第4表 SH3・SH4・SH5の遺物観察表

採 取 地 点	遺 構 番 号	時 代	器 種	器 面 調 整					法 量(cm)			透 存 率	備 考	
				口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口径	最大胴	底径			
57	SH3	弥生 壺	横ナデ	横ナデ									口縁部破片	
58	SH3.40	弥生 壺	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ							口縁・胴部	
59	SH3.36	弥生 高坏		斜行ハケ後、ミ ガキ									坏部破片	
60	SH3.25	弥生 壺			ナデ後、板状工 具によるナデ			ナデ			4.80		胴底部	煤付着
61	SH3.33	弥生 壺			ナデ	ナデ後、所々縦 ハケ	ナデ							
62	SH4.8	弥生 壺	横ハケ	横ハケ	斜行ハケ									
63	SH4.37	弥生 壺	横ナデ	横ナデ									口縁部破片	
64	SH4.36	弥生 壺?			ナデ									煤付着
65	SH4.11	弥生 壺?			不定方向のハケ	所々ハケ工具痕	ナデ				9.00			煤付着
66	SH4.9	弥生 壺?			斜行ハケ後にナ デ	縦ハケ					3.20		胴/底部	
67	SH5.3	弥生 壺	横ハケ	横ナデ										
68	SH5.68	弥生 高坏	ナデ	ナデ	ナデ									

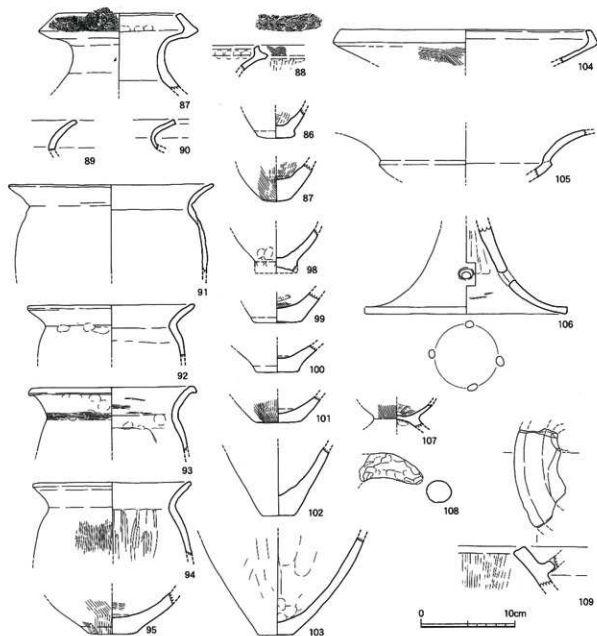
SH9(第13図)

SH9は南北に長い調査区なかでは北部の尾根部斜面中腹に平坦部を造作した部分にある。標高78m前後のところにあたる(第3図)。遺構の東半検出面をSH5に切られる関係にあるが、SH5の床面よりSH9の床面より深いレベルにある為、ほぼ住居のラインが復元できる。しかし北部から東部は斜面のため流出し、住居の景観は明確ではない。曲線ラインと壁周溝が検出されたことから円形を基調とした住居地で、直径約9.40mの規模をもっている。住居地の中央部で南北に長い長楕円形の炉址が見つかった。規模は長軸0.70m、短軸0.30m、

深さ0.10mであり、西側と南側に隣接して焼土の集中する部分がある。壁沿いには壁周溝がある。柱穴は壁から柱穴中央部までが1.20mで、遺存する壁沿いに6穴ある。おそらく12前後の柱穴からなっていたと推定できる。遺物は炉址の東側にやや集中するが、他は全域的に散布する。



第14図 SH9実測図



第15図 SH9出土土器実測図

遺物(第15図)

87・88は二重口縁壺で、口縁部文様帯に櫛歯の波状文を施文する。91～94は甕である。104～106は高坏である。104は坏部下半から角張った口縁部が短く内傾気味に立ち上がる。105は段があり、外反する口縁部が長く延びる。106は脚部で、スロープ状に開き、4箇所の穿孔がある。107は台付鉢で、109は器台である。

第5表 SH6・SH7・SH8・SH9の出土土器観察表

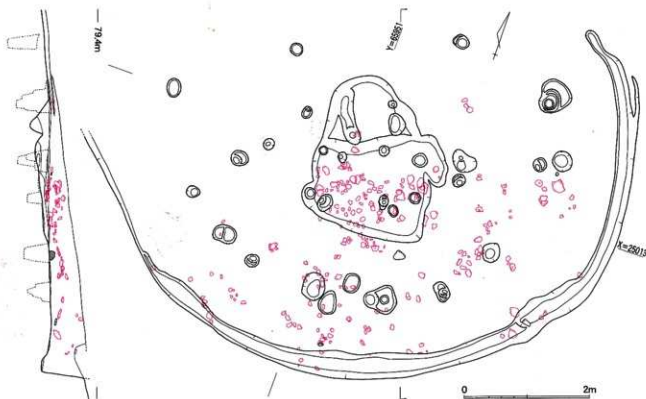
挿 回	遺構番号	時代	器種	口縁部内部	口縁部外部	胴・脚部内面	胴脚部外面	底部外面	口径(cm)	最大胴部	底径	遺存率
69	SH6	弥生				ナデ	ナデ				3.4cm	底部破片
70	SH6	弥生	壺	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ		21.30			口縁・胴部
71	SH7	弥生	群台	ミガキ	ミガキ, 磨損き差敵				26.00			
72	SH7	弥生	壺			指ナデ後, 縦ハケ	縦ハケ					
73	SH7	弥生	高坏	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ					
74	SH7	弥生	壺	ナデ				ナデ			3.80	底部
75	SH8	弥生	壺	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ							口縁部破片
76	SH8	弥生										
77	SH8	弥生	壺	横ナデ		不定方向ハケ	縦ハケ		19.90			口縁・胴部破片
78	SH8	弥生	壺	横ナデ	ナデ							口縁部破片
79	SH8	弥生	壺	横ナデ	横ナデ	ナデ, 斜行ハケ	縦ハケ					口縁部破片
80	SH8	弥生	鉢	ヨコナデ	横ハケ	縦ハケ	縦ハケ					
81	SH8	弥生	鉢	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	縦ハケ		13.20			
82	SH8	弥生	壺	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ, 縦ハケ		12.50	13.40		口縁部破片
83	SH8	弥生	壺			板工具ナデ	ナデ	ナデ			3.50	底部破片
84	SH8	弥生	壺	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	縦ハケ					
85	SH8	弥生	壺	ヨコナデ	ヨコナデ	指ナデ後, 縦ハケ	縦ハケ					
86	SH8	弥生				縦ハケ	縦ハケ			25.80	丸底	胴・底部破片
87	SH9	弥生	壺	横ナデ		ナデ	横ナデ		13.40			口縁, 胴部破片
88	SH9	弥生	壺	横ナデ	縦ハケ							口縁部破片
89	SH9	弥生	壺	ナデ	ナデ							
90	SH9	弥生	壺	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ					口縁部小破片
91	SH9	弥生	壺						22.40	21.00		
92	SH9	弥生	壺						18.00	16.00		口縁・胴部破片
93	SH9	弥生	壺	横ナデ, 横ハケ	横ナデ, 横ハケ	横ナデ	ナデ		18.00	14.30		
94	SH9	弥生	壺	横ナデ	横ナデ	縦方向ヘラクスリ	縦ハケとナデ		172.00			口縁・胴部破片
95	SH9	弥生	壺			ハケ後にナデ	ハケ後にナデ	ナデ			5.10	底部破片
96v	SH9	弥生	壺か			不定方向のハケ	ナデ	ナデ			4.00	
97	SH9	弥生	壺			不定方向のハケ	ナデ	ナデ			3.00	底部破片, 丸底
98	SH9	弥生	壺			ナデ	ナデ	指ナデ			4.50	
99	SH9	弥生	壺			不定方向のハケ	ナデ	ナデ			5.00	
100	SH9	弥生				ナデ	ナデ	ナデ			4.50	
101	SH9	弥生										
102	SH9	弥生	壺			ナデ					3.50	底部破片
103	SH9	弥生	壺			指ナデ	縦方向の板ナデ	ナデ			3.80	胴・底部破片
104	SH9.7	弥生	高坏	横ナデ	横ナデ	ナデ	横ハケ		27.30			坏部破片
105	SH9.34	弥生	高坏	ナデ, 横ナデ	横ナデ, ナデ							坏部破片
106	SH9.106	弥生	高坏			紋り風, ナデ工具痕	縦ナデ, 縦部横ナデ				22.00	底部破片
107	SH9.181	弥生	台付鉢	不定方向のハケ	縦ハケ			指ナデ				底部破片
108	SH9.76	弥生	甌									胴部, 手くじ
109	SH9.89	弥生	甌?			ナデ	縦ハケ					破片

SH10

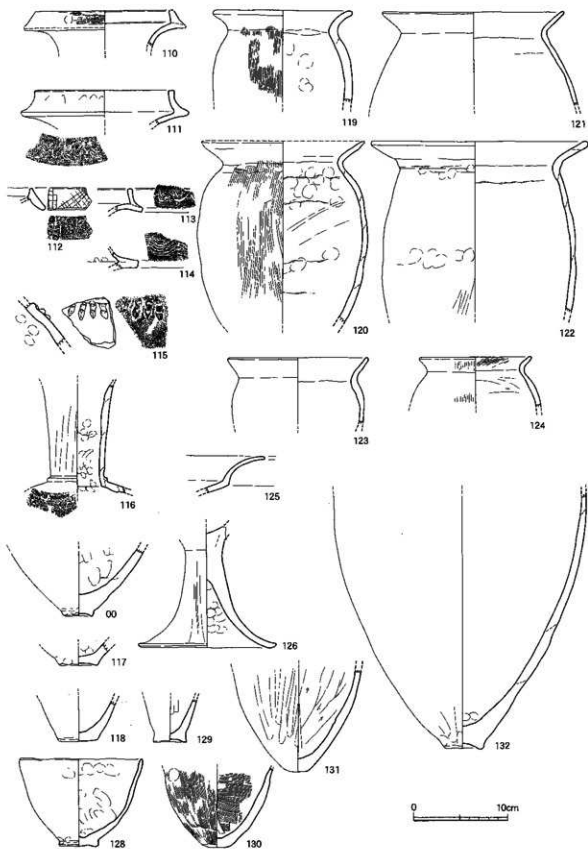
SH10は南北に長い調査区なかでは北部の尾根部斜面で、標高79m前後のところにあたる(第3図)。遺構の北西部が斜面で流出しているが、ほぼ3分の2が残存しているので住居地のラインがわかる。直径8.40m前後の円形の大型住居地である。最も残りの良い南東壁付近では検出面から床面までの深さが65cm前後である。壁際には壁周溝が残っている。柱穴は壁際から柱穴の中央部分までが1.50mから1.30m前後の距離をおいており、10穴が残っている。これらのうち柱穴間がやや狭く2穴づつの並びが観察される。住居地の中央には三角形と長方形の土坑が南北に接続したような炉址がある。三角部分の底辺近くには柱穴が両側に位置し、長方形部分はやや深く柱穴も東西対になるように位置する。

第6表 SH10出土土器観察表(1)

採 回	遺 構 時 代	特 種	器 面 調 整					法 量(cm)		遺 存 率	備 考
			口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口径	最大胴部 底径		
110	SH10.75	弥生 壺	横ナデ	横ハケ、ナデ				15.4cm		口縁部破片	二重口縁
111	SH10.25	弥生 壺		横ナデ、波状文				15.4cm		口縁部破片	二重口縁
112	SH10.	弥生 壺	横ナデ	格子彫み目、浮文						口縁部破片	二重口縁
113	SH10.	弥生 壺	横ナデ	横ナデ						口縁部破片	二重口縁
114	SH10.	弥生 壺	ナデ?	波状文						口縁部破片	二重口縁
115	SH10.	弥生 壺			ナデ	横ナデ					垂下する浮文
116	SH10.	弥生 壺	ナデ?	縦方向のナデ	ナデ	竹管文				口縁部破片	長頸壺
117	SH10.15	弥生 壺			ナデ				3.4cm	壺底部破片	
118	SH10.26	弥生 壺				ナデ	ナデ		4.3cm	底部破片	
119	SH10.8	弥生 壺	横ナデ	横ナデ	ナデ	縦ハケ		15.3cm	12.1cm	口縁胴部	二次焼成



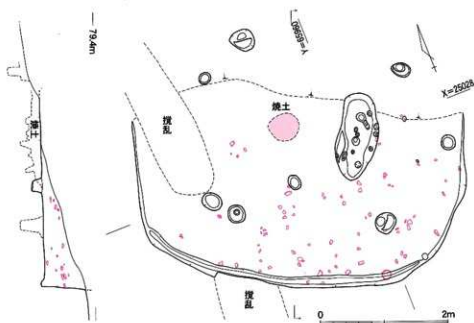
第16図 SH10実測図



第17圖 SH10出土土器実測圖

第7表 SH10出土土器観察表(2)

陣 団	遺構 番号	時 代	器 種	器 面 調 整					法量(cm)			遺存率	備考
				口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口徑	最大胴部 底徑	底徑		
120	SH10.3	弥生	甕	横ナデ, ナデ	横ナデ	斜行ナデ, ナデ	縦ハケ, 下半部ナデ		17.90	18.60		内面輪痕のみ	煤付着
121	SH10.47	弥生	甕						19.9cm				
122	SH10.16	弥生	甕		ナデ				22.8cm	21cm		口縁-胴部	
123	SH10.11	弥生	甕						15.5cm	14.5cm		口縁-胴部	
124	SH10.	弥生	甕	斜行ハケ	縦ハケ	ヘラケズリ	縦ハケ		12.3cm			口縁-胴部	
125	SH10.	弥生	高坏									坏部破片	
126	SH10.41	弥生	高坏			ナデ	縦ハケ			15.1cm		脚部は片	
127	SH10.67	弥生	甕							4.3cm			
128	SH10.47	弥生	鉢	指ナデ		指ナデ			13.5cm	4.3cm			
129	SH10.29	弥生	?			縦ナデ	縦ナデ	ナデ		3.7cm		底部破片	
130	SH10.6	弥生	甕			横ハケ	縦ハケ			2.1cm		胴部-底部	
131	SH10.4	弥生	甕?			ヘラケツリ	ヘラミガキ	ナデ		1.8cm			
132	SH10.49	弥生	甕			ナデ	ナデ	ナデ	28.2cm	4.3cm		胴部-底部	煤付着



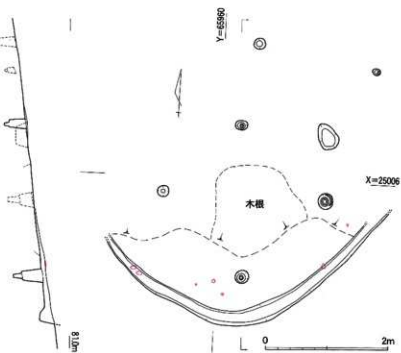
第18図 SH11実測図

SH11(第3図-第18図)

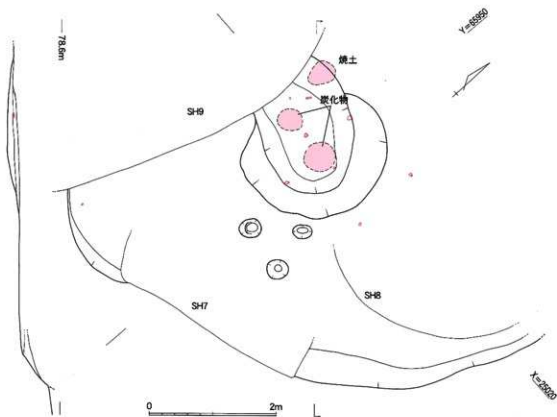
SH11は南北に長い調査区のなかでは北部の尾根部東側斜面で、標高76m前後のところに位置する(第3図)。遺構の北西部分が斜面で流出しているが、大部分が残存し、柱穴の位置から住居址の規模は南北2.7m、東西2.6mで隅丸・胴張りの方形住居址である。直径8.40m前後の円形の大型住居址である。柱穴は東西に長い1間1間を基本とし、東側小口に1穴、西側の主柱穴に1穴ずつ隣接し、西側小口中央に柱穴はない。西側小口が入口に隣接するとみられる。住居址の奥部、東半分中央付近に長軸1.37m・短軸0.63mの長楕円形の炉址が位置する。

SH12(第3図、第19図)

SH10は南北に長い調査区
なかでは中央部の尾根部斜面
で、僅かに東側を向く位置あた
り、標高は80.50m前後のとこ
ろにあたる(第3図)。遺構の北
半部分が斜面で流出している
が、平面形から小型の方形住
址である。壁周溝が残る。



第19図 SH12 実測図



第20図 SH13実測図

SH13(第3図・第20図)

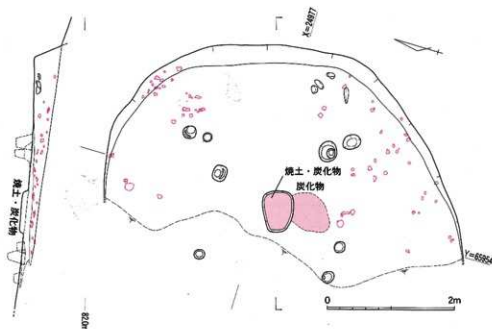
SH13は南北に長い調査区のなかでは北部の尾根部斜面中腹に平坦部を造作した部分にある。標高78m付近のところにあたる(第3図)。遺構の南側壁付近を除いてSH7・SH8・SH5・SH9などと重複しており遺構の構造は明確でない。南側の壁からみて円形の大型住居址であることは間違いない。検出面からの深さ数cmである。主柱穴の構成は明確ではないが、二箇所の柱穴と思われる穴を確認した。なお、遺構の中央部に南北2.60m、東西2.30mの巨大な炉址が位置している。これは円形の土坑に楕円形の土坑が重複したような形である。内部には二箇所の炭化物密集部と一箇所の焼土密集部がみられた。

SH14(第3図・第21図)

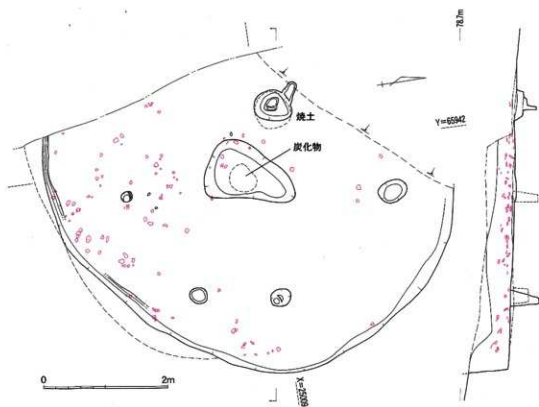
SH14は南北に長い調査区のなかでは南部の尾根部の平坦地の西側斜面に位置する。ここは勾配が急な標高81.20m前後のところに位置している(第3図)。こうした地勢から遺構の西半部が流出している。残された平面形から円形の住居址で、直径が約5mの規模をもつ。残りの良い東壁付近での検出面から床面までの深さは0.4m前後である。柱穴は7穴あるが、並びから基本的に四本主柱穴である。ほぼ中央部に楕円形の炉址が位置し、その規模は東西(長軸)0.65m、南北(短軸)0.51mで内部に焼土・炭化物が詰まっていた。

SH15(第3図・第22図)

SH15は南北に長い調査区のなかでは北部の尾根部西側斜面で、標高78.20m前後のところに位置する(第3図)。地勢が北側から西側へ回り込む部分に当たったため、遺構の北西部の半分が斜面で流出している。3分の2が残存した部分から住居址の規模は直径6.7mの円形住居址である。炉址は住居址の中央にあり、南北1.5m、東西1.2mの大きさである。南側が底辺とする二等辺三角形を呈する。炉址の中央部に炭化物が集中していた。炉址の西側に柱穴状のビットがあるが、内部に焼土が詰まっていた。柱穴は残りの良い尾根側に4穴みられ、炉址を取り巻くように8穴前後あったことが推定される。



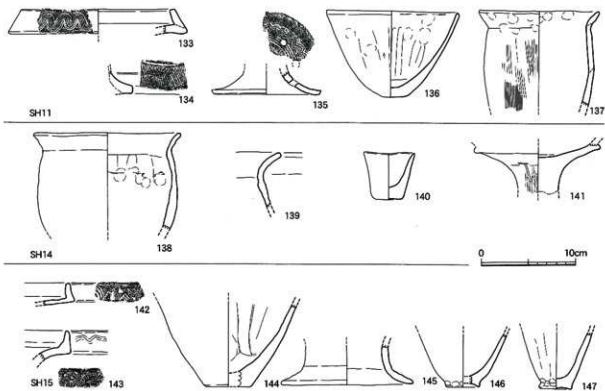
第21図 SH14実測図



第22図 SH15実測図

第8表 SH11・SH14出土土器観察表

探 洞	遺 物 番 号	時 代	器 種	器 面 調 整					法 量 (cm)			遺 存 率	備 考	
				口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口径	最大胴径	底径			
133	SH11.21	弥生	壺	横ナデ	横ナデ					16.3cm			口縁部	二重口縁
134	SH11.43	弥生	釜		斜格子、横ナデ								口縁部	二重口縁
135	SH11.12	弥生	器台			ナデ	沈線、波状文					11.7cm	脚部	
136	SH11.31	弥生	小鉢	横ナデ	横ナデ	縦ヘラナデ	縦ヘラナデ	ナデ	14.3cm		2.8cm		完形	
137	SH11.21	弥生	壺	指圧痕	指圧痕	ナデ	縦ハケ		12.9cm	11.7cm			口縁-胴部	煤付着
138	SH14.36	卯月	壺				縦ナデ		15.6cm	14.8cm			口縁-胴部	
139	SH14.12	弥生	壺										口縁部破片	
140	SH14.2	弥生	コップ						5.5cm		3.3cm		完形	
141	SH14.36	弥生	高坏	ナデ	ナデ		縦ヘラミガキ						胴下半部上半	
142	SH15.	弥生	壺	横ナデ	ナデ、波状文								口縁部破片	
143	SH15.39	弥生	壺	ナデ	ナデ、波状文								口縁部破片	
144	SH15.22	弥生	壺			縦指ナデ					4.6cm		胴部-底部	
145	SH15.	弥生	器台				格子状の凹凸				14.2cm		脚部破片	
146	SH15.15	弥生	壺			ナデ	ナデ	横ナデ			3.7cm		胴部-底部	上底
147	SH15.18	弥生	?				縦ナデ				3.6cm		胴部-底部	



第23図 SH11・SH14・SH15出土土器実測図

第9表 SH11・SH14出土土器観察表

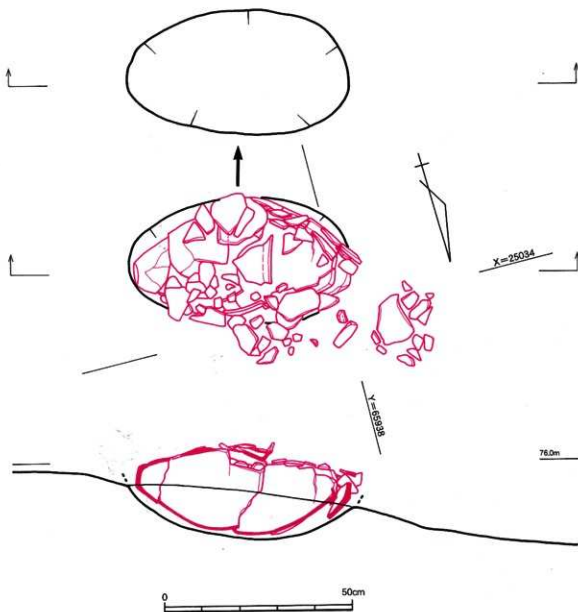
採掘 回	遺物番号	時代	器種	器面調整					法量(cm)			遺存率	備考	
				口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	底部外面	口径	最大胴部	底径			
148	壺棺35	弥生	甕	横ナデ	横ナデ	ナデ後ハケ	ナデ、ナデ後縦ハケ						口縁部破片	
149	壺棺34	弥生	甕	横ナデ	横ナデ	ナデ、板工具ケズリ	ナデ、縦斜行ハケ	ナデ	21.5cm	24.5cm	5.2cm		壳形	
150	壺棺3	弥生	甕			ナデ、板工具ケズリ	ナデ、板の不定ナデ				7.9cm		胴部・底部	煤付着
151	壺棺2・3	弥生	甕			ナデ後、縦ハケ	ナデ、縦斜行ハケ	ナデ		2.6cm			胴部・底部	
152	SD2,1	弥生	甕				胴部付近に三角突帯						胴部破片	
153	SD1,11	弥生	甕						19.8cm	20.1cm			口縁・胴部破片	
154	ハイキ、8	弥生	甕	横ナデ	横ナデ	ハケと指ナデ	縦ハケ後にナデ		21.6cm	21.3cm			口縁・胴部破片	
155	試掘1地点	弥生	甕						14.3cm				口縁・胴部	
156	ハイキ、9	弥生	甕						18cm	16.6cm			口縁・胴部破片	
157	G6,	弥生	甕			ナデ	黏り付け割目突帯						胴部破片	短玉状残
158	G6,	弥生	甕	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ後、波状文						口縁部破片	
159	G6,	弥生	高坏	ナデ		絞り歯。	ナデ?						坏・胴部破片	
160	G6,40	弥生	高坏	ナデ	縦ヘラケズリ		縦ナデ						坏・胴部破片	
161	G7,63,65	弥生	鉢	指圧ナデ	ナデ後タタキ	斜行板ナデ	ナデ後ヘラミガキ		20.1cm	22.3cm	丸底	0.25	底部破片	
162	G6	弥生	甕			ナデ	ナデ	ナデ			3.1cm		底部破片	
163	F7,6	弥生	甕	ナデ、縦斜ハケ	横ナデ縦ハケ				7.0cm				口縁・胴部破片	二重口縁
164	F7,4	弥生	甕	横ナデ	ナデ後波状文								口縁部破片	二重口縁
165	F7,	弥生	高坏	横ナデ、ナデ	横ナデ、ハケ								坏部破片	

妻棺墓(第3図・第24図)

妻棺墓は南北に長い調査区のなかでは北部にあたり、尾根部がやや緩やかになる西側斜面で、標高76m前後のところに位置する(第3図)。尾根筋は北方向へ標高が低くなるが、妻棺墓はこれに直交するように構築されている。薄い腐食土を除去すると砂質土壌に楕円形の穴を掘り、妻を組み合わせて埋置している。塚かたの底辺と妻との間に隙間はない。妻を組み合わせる方法は妻の口縁部を打ち欠き調整をし、西棺に東棺を差し込む。また西棺底部付近は、口縁部から胴部上半を打ち欠いた別の妻に入れ子状に差し込む。また口縁部から胴部にかけての大型破片を東棺の上面に被せていた。このように4個体の妻を組み合わせていたが、概ね東西が0.6m、南北幅0.35mの規模であることから小児を埋葬した棺である。

遺物(第26図)

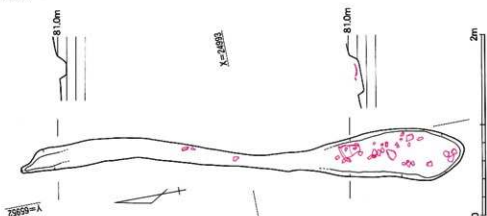
148は東棺の上に被せていた妻の大型破片で、胴部の上部が僅かに張り、口縁部は外傾させている。149は西棺の主棺である。胴部の上半が胴張りで、逆L字形に曲げている。150は西棺の底部を被っていた妻の胴部下半から底部にかけてのものである。151は胴張りの妻で、東棺の主棺。



第24図 妻棺墓実測図

SD 1(第3回)

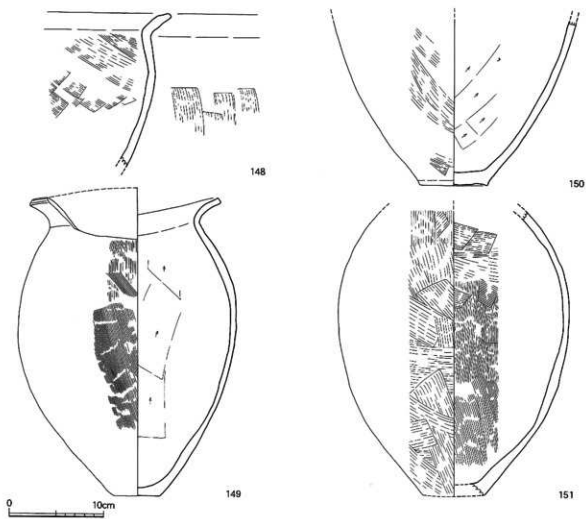
SD 1は南北に長い調査区のなかでは中部にあたり、尾根部が急な尾根筋の西側斜面で、標高81m前後のところ(第3回)に位置する(第3回)。長さ4.87mで、北側で0.25m、南側で0.57mの幅をもっており、等高線に沿って延びている。深さは0.1mである。長さ、幅、深さとも極小規模であり、排水施設とも想定できるが、住居址との関連が判然としない。



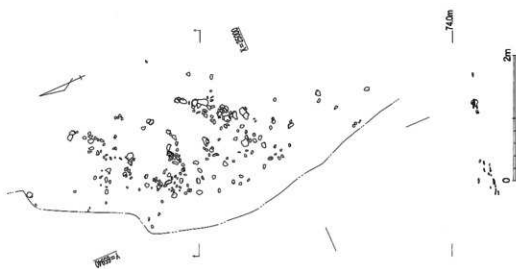
第25図 SD 1実測図

第10表 包含層出土土器観察表

採 取 区	遺 物 番 号	時 代	器 面 調 整				法 量 (cm)			遺 存 率	備 考	
			口縁部内面	口縁部外面	胴(脚)部内面	胴(脚)部外面	口径	最大胴部	底径			
166	F7,39	弥生 器台?			横ナデ後に板調整	縦ハケ後に縁部のケズリ					胴部破片	
167	F7,	弥生 器台?			縦ハケ	縦ハケ、三角突帯						穿孔あり
168	G7,67	弥生 壺	ナデ	ナデ	ハラケズリ	縦ハケ		20.1cm			口縁-胴部片1/4	
169	G7,27	弥生 壺	横ハケ後に横ナデ	横ナデ	ナデ後、ハラミガキ	縦ナデ		22.4cm			口縁・胴部破片	弥生中期
170	E7,15	弥生 壺	横ナデ、	横ナデ				19.0cm			口縁・胴部破片	二重口縁
171	E7,13	弥生 高坏	横ナデ、ナデ	横ナデ後波状文、胴部縦ハケ							坏部破片	
172	E7,2	弥生 壺		横ミガキ							口縁部破片	
173	拡張区	弥生 壺	横ナデ	横ナデ、ナデ後波状文				15.4cm			口縁部破片	二重口縁
174	拡張区	弥生 器台	波状文	ナデ、縁部波状				9.15cm				
175	拡張区33	弥生 壺	横ナデ、胴部ナデ	口唇部ナデ後刻み目、ナデ							口・胴部破片	二重口縁
176	G4,30	弥生 高坏	斜行ハケ後ナデ	横ナデ後波状文、胴部ナデ							口縁部破片	口縁肥厚
177	G4,35	弥生 高坏	横ナデ	横ナデ							坏部破片	段が付く
178	拡張区	弥生 壺?			ナデ	縦ハラミガキ	ナデ	4.3cm			底部破片	
179	F8,20	弥生 壺	横ナデ、胴部板調整	横ナデ、板ナデ	指ナデ	ナデ		13cm			口縁・胴部胴部破片	二重口縁
180	F8,30	弥生 支脚	指ナデ	指ナデ	指ナデ	指ナデ	ナデ					



第26图 甗棺夹测图(土器)



第27图 废弃土器分布图



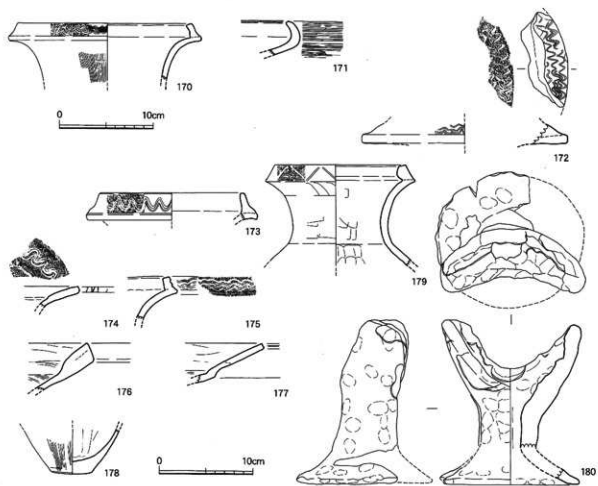
第28図 包含層出土土器実測図

SK 1(第30図)

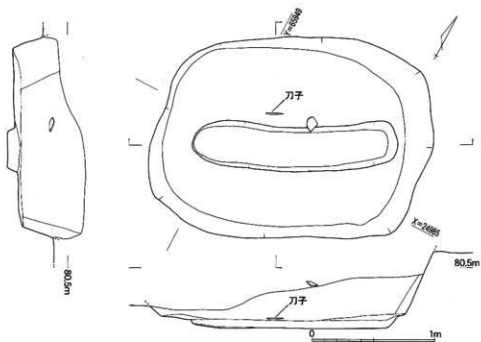
SK 1は南北に長い調査区なかでは南部の尾根部の西側斜面に位置する。ここは勾配が急で、標高80.50m前後のところに位置している(第3図)。平面形は長軸2.32m、短軸1.65mの規模をもつ隅丸長方形である。墓坑は南北方向の等高線にはほぼ直交する状況から、側方からみると谷側が樺状に流出・削平されている。残りの良い東壁付近での検出面から床面までの深さは0.54m前後である。更に墓坑の長軸に沿うように中央部に木棺が設置された確みがある。その規模は東西(長軸)1.68m幅0.36m、深さ0.06mである。

遺物(第31図1)

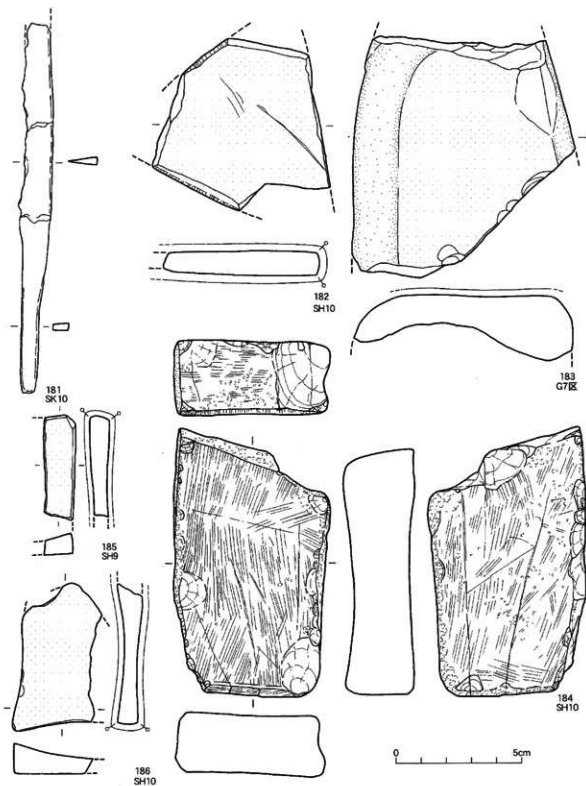
木棺北側0.1mの墓坑底に刀子が見つかった。木棺に平行し、切っ先を西側の谷方向に向けていた。現状で長さ14.7cm、幅1.2cmである。



第29图 包含层出土石器实测图



第30图 SK 1 实测图



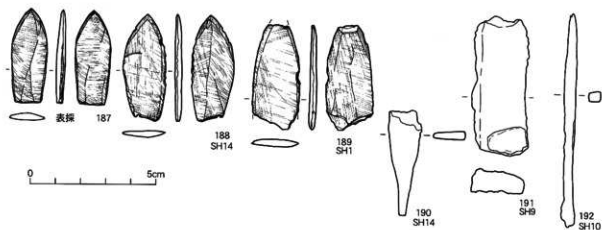
第31図 鉄器・砥石実測図

石器類(第31図182~186,第32図187~189,第33図,第34図)

182~186,193は砥石である。185と186は泥岩と思われる石を用いた小型例である。両面が大きく窪んでいる。193は片岩系の石を用いており、石斧状である。182も片岩を用い、平面形が三角形を呈する。両面に磨り面がある。183も粒子の細かい泥岩を用い、裏面を中心に大きく破損している。

187~189は磨製石楯である。石材はいずれも結晶片岩系である。大野川流域の類例と比べて、長さのわりに幅もある点の特徴。基部形態は187が平基、188は弧状の凹基、189は不明である。

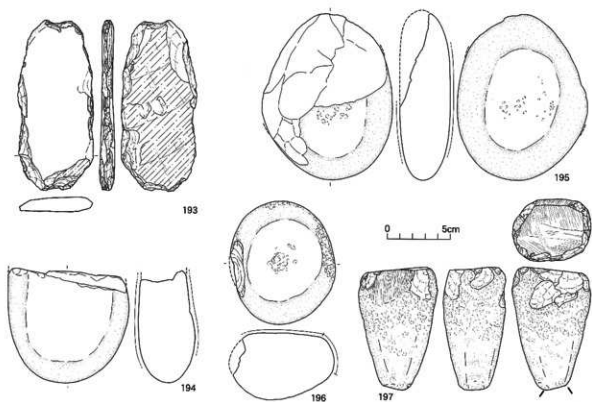
194~196は磨石である。196は右側縁と表面中央部に打痕がある。



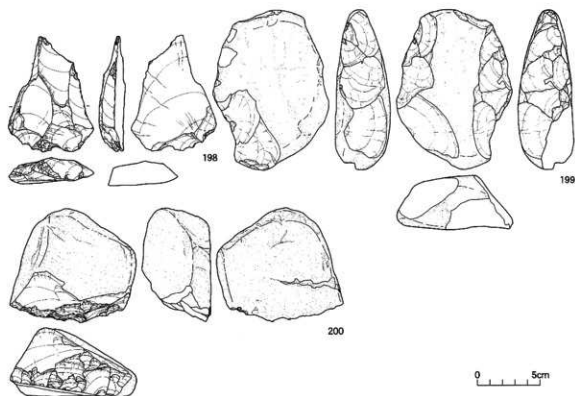
第32図 石器-鉄器実測図

鉄器類(第32図190~192)

190はSH14出土の鉄鏃で、尖端部方向を大きく欠く。191はSH9 遺物番号：81出土の鉄鑿で、上端部方向が細くなる。192はSH10出土であるが、細かい位置は不明。鉄鏃か。



第33図 磁石・石器実測図



第34図 石器実測図

197は掃り粉木風の用途を持つものである。石材は粗い砂岩。平面形は逆楕形であるが、機能部分は図の下端から上に3.5cmまでの部分である。石皿か磨石を素材にハツリと敲打を加えて整形している。幅広の上面と側面には磨石の磨面が残存する。上端面と周囲が磨滅している。

198は大型の不定形剥片を用いている。上端にむけて幅が狭小になる素材である。下端の打面部方向が加工により除去されている。加工は粗く、スクレーパーか角錐状石器の未成品と推定される。旧石器時代の遺物である。

199は楕円形に近い形の礮器である。両側を中心に粗い剥離痕が残されている。200は角の取れた角礮を素材とした礮器である。裏面側から大まかな打撃、細かい打撃の順に剥離痕が形成されている。刃部の平面形は弧状である。縄文時代早期の遺物と推定される。

201は削器である。石材から旧石器時代の遺物である。

アカホヤ深堀区は調査区北端の緩斜面でアカホヤの堆積と黒曜石の剥片がみられたことから設定した。散漫ながら姫島産黒曜石を石材とする石器類と若干の焼礮が見つかったが、格別集中する状況はなかった。姫島産黒曜石は縄文時代早期田村式・下管生式土器段階から多用されるものであることと、出土層位から考えて縄文時代早期後半頃の遺物と考えられる。211は石核で、姫島産角閃安山岩を使用している。姫島産角閃安山岩は縄文時代早期早水台式土器頃まで用いられていることから、早水台式土器以前の遺物であろう。土器類は見つかっていない。



第35圖 石器実測図

第11表 弥生時代遺構と拡張区の縄文時代石器観察表

押回番号	時代	注記	種類	長	幅	厚	重量	石材	備考
31	182	弥生 SH10-54	砥石	7	6.85	1	76.4	片岩	破損
31	183	弥生 G7-33	砥石	9.5	8.9	2.55	283.3		破損
31	184	弥生 SH11-0	砥石	10.65	6.25	3	313	頁岩	
31	185	弥生 SH9-58	砥石	4.1	1.3	0.8	7.4		破損
31	186	弥生 SH10-54	砥石	5	3.2	0.9	27		破損
32	187	弥生 表採	石鏝	3.73	1.38	0.33	2.38	緑色片岩	
32	188	弥生 SH14-42	石鏝	4.2	1.68	0.3	2.68	緑色片岩	
32	189	弥生 SH11-286	石鏝	4.15	1.88	0.28	3.37	緑色片岩	破損
33	193	弥生 SH11-304	砥石	13.7	6.1	1.25	156.76	緑色片岩	
33	194	弥生 SH11-5	磨石	9.1	9.7	4.5	591.2	輝石安山岩	
33	195	弥生 SH9-9	磨石	13.3	10.5	4.1		硬質砂岩	
33	196	弥生 SH2-280	磨石	9.9	8.3	5.4	631.7	角閃石安山岩	
33	197	弥生 SH5-1	播石	9.9	6.35	5	403	砂岩	播粉木
34	198	旧石器 73針19	角錐状石器	9.7	7.2	2.25	119.49	流紋岩	未成品
34	199	縄文 SH11-120	礮器	13.6	9.75	4.6	660	角閃石安山岩	
34	200	縄文 SH4-2	礮器	9.52	10.67	5.85	624	流紋岩	
35	201	旧石器 SH11-120	礮器	5.15	10.08	1.95	75.28	流紋岩	未成品
35	202	縄文 73針13	石鏝	2.3	1.55	0.4	0.94	チャート	
35	203	縄文 73針11	刃器	6.75	2.5	1.2	15.75	姫島産黒曜石	
35	204	縄文 FBNo.29	UF	3.6	3	1.3	7.79	姫島産黒曜石	
35	205	縄文 73針8	剥片	2.35	2.3	1.1	3.45	姫島産黒曜石	
35	206	縄文 F7-42	剥片	2.95	2.1	0.43	2.16	姫島産黒曜石	
35	207	縄文 F8-9	剥片	2.54	2.45	1.3	5.33	姫島産黒曜石	
35	208	縄文 SH10	剥片	4.7	2.32	1.25	9.22	姫島産黒曜石	
35	209	縄文 表採	剥片	3.75	2.6	1.1	7.77	姫島産黒曜石	
35	210	縄文 73針14	石板	1.92	3.95	1.45	8.17	姫島産黒曜石	
35	211	縄文 73針9	石板	3.35	5.5	3.35	57.46	姫島産/以賀安	
未掲載	縄文 73針7	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 73針10	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 73針18	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 73針21	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 拡張区74	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 C6	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 G7-88	砕片						姫島産黒曜石	
未掲載	縄文 F8-19	剥片						姫島産黒曜石	

第4章 まとめ

最後に、各遺構の時期を示し、上辻遺跡の集落の位置づけに触れておきたい。時期区分は、隣接する遺跡である岡遺跡群で5期に分けた編年を採用し、以下にその概要を示しておく。

岡1期 いわゆる安国寺式土器(壺)が成立する時期である。安国寺式土器は、口縁部に連続山形文が施文され、上面には勾玉状あるいは円形の浮文が付され、さらに胴部肩の突帯下端に勾玉状浮文を添付するのを特徴とする。さらに、頸部あるいは肩部に突帯が多いのも特徴である。この時期の壺を見ると、東北部九州系跳ね上げ口縁に系譜を有する「く」字状口縁壺に統一されるが、口縁部上面にやや内湾する窪みを有する。底部は比較的底径の大きな平底、または僅かな上げ底である。他の土器を見ると、高杯の脚の長方形透かしは姿を消している。

岡2期 安国寺式土器の壺口縁部が上下に拡張し始める時期で、口縁部上面に浮文を貼付する個体は少なくなり、肩部突帯下部への浮文添付が基本となっていく。しかし、口縁部外面には「連続山形文」が施され、波状文は出現していない。壺は完全に「く」の字状口縁なり、底部は底径の大きな上げ底になる。この時期は、小型土器の中にはミガキを施したり、赤彩を施したりするような中期的な様相を有するものが残存する。

岡3期 安国寺式土器の壺は、口縁部が上方に拡張し、二重口縁が成立する。外面には一条の櫛描き波状文を施文し、ごく僅かに口縁部上面に円形浮文を貼付する個体も残る。壺は前期期に出現した上げ底の底部が、やや径を縮小する傾向を持つが、全体のプロポーションなどの変化は漸次的である。また、この時期までは、依然として小型壺、脚台などに“中期的”様相が残存する。

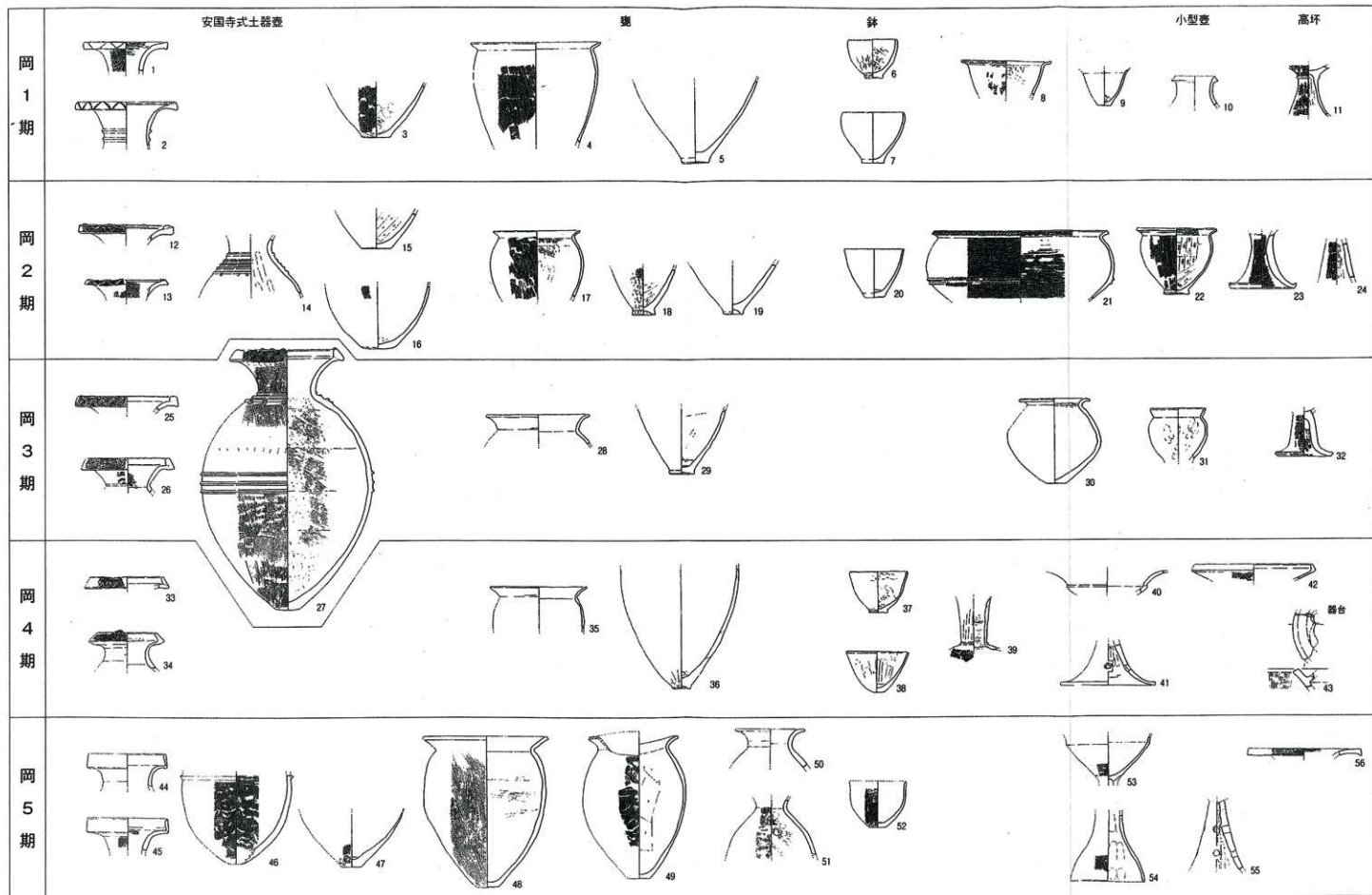
岡4期 安国寺式土器の壺口縁部はさらに上方に拡張し、広いキャンパスに基本的に一条又は、まれに二条の櫛描き波状文が施文されるようになる。同時に、口縁部上面の浮文は姿を消す。壺は前期に比べ底径が小さくなるが、依然として上げ底状を呈する。この時期から高杯の脚部に円形の透かし穴がつけられるようになる。

岡5期 安国寺式土器の口縁部は直立ぎみとなり、外面に一条または二条の波状文が施される。底部は、やや丸みのある平底になる。壺は上げ底が無くなり、小さな平底になる。また、この時期から口縁部に波状文を施すなど装飾を有した大型の器台が見られるようになる。

以上の岡1期から岡5期は、それぞれ弥生時代後期初頭、前葉、中葉(古)、中葉(新)、後葉(古)に比定される。上辻遺跡SH1は岡4期から5期、SH2は岡5期、SH3からSH6は遺物が少ないが岡4期から5期か。SH7とSH8は岡5期、SH9、SH10、SH11、SH14、SH15は岡4期、甕棺は底部の残る3個体はいずれも平底であり、岡5期に位置づけられる。

以上のように、上辻遺跡は岡4期から岡5期に位置づけられる、比較的短期間に形成された集落遺跡である。上辻遺跡に隣接する岡遺跡群は、岡の丘陵から派生する細尾根のごく僅かな平坦地の敷力所に弥生時代集落が展開する遺跡である。それらの調査結果によると、それらは2から3時期にまたがるもの、拠点集落と呼べるような継続性を持つ大規模な集落は無い。上辻遺跡はそのような集落の一つと位置づけられるだろう。この岡の丘陵では第2図に示す清水ヶ追遺跡から平形銅剣が過去に出土したと言われている。清水ヶ追遺跡の平形銅剣I式は、一般的には中期末から後期前半に埋納されたと考えられているが、この岡の丘陵に集落が出現する時期とほぼ重なる時期である点は何らかの接点があったことを想定させる。(小柳)

上辻遺跡や隣接する岡遺跡の調査によって丹生台地北部地域において弥生時代後期に途切れることなく人々が居住する地域であることが判った。実年代で言えば紀元前50年頃から西暦200年頃のことである。こうした遺跡は台地上の遺跡であり、水田耕作が不可能な地域である。おそらく地形から考えて丹生川沿いでの水田耕作が推定される。今回報告する上辻遺跡や岡遺跡からは弥生時代後期を中心とする土器群がでていて、隣接する清水ヶ追遺跡の四国系平形銅剣の流入時期を考える重要な資料といえよう。(総頁)



縮尺 1/8 (1~6, 8~13, 16~19, 21~26, 28~32 善福寺2地区)
 (7, 14, 15, 20, 27, 48, 55 内無川4地区
 33~47, 49~54, 56 上辻遺跡)

第36図 岡遺跡群 弥生土器編年図

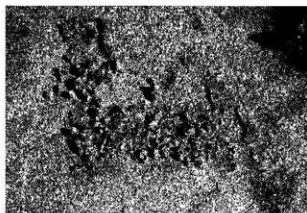
(善福寺2地区、内無川4地区については
 『岡遺跡群』(大分県埋蔵文化財センター・2007)より引用)



上辻遺跡遠景



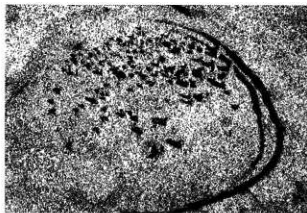
上辻遺跡の空中写真



SH1-全景



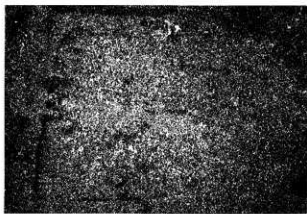
SH5、7、8、13-全景



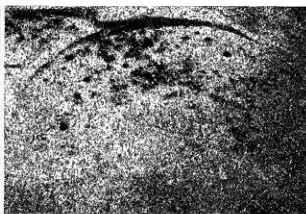
SH2-全景



SH7



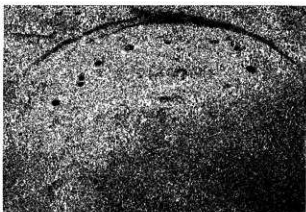
SH13-全景



SH9全景



SH4(左)、SH6(右)



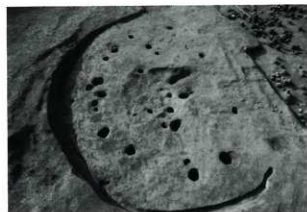
SH1-完備狀況



SH10-遺物の出土状況



SH13-全景



SH10-完掘状況



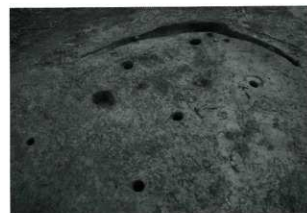
SH14-全景



SH11-完掘状況



SH15-全景



SH12-完掘状況



廃棄土器



1号 雙棺 (1)



1号 雙棺 (2)



1号 雙棺 (3)



SK-1 完掘狀況



SH1 : 1



SH1 : 2



SH1 : 3



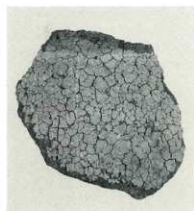
SH1 : 4



SH1 : 5



SH1 : 6



SH1 : 8



SH1 : 9



SH1 : 10



SH1 : 11



SH1 : 12



SH1 : 15



SH1 : 16



SH1 : 17



SH1 : 18



SH1 : 21



SH1 : 22



SH1 : 24



SH1 : 25



SH1 : 26



SH1 : 27



SH1 : 28



SH1 : 30



SH1 : 31



SH1 : 32



SH1 : 33



SH2 : 34



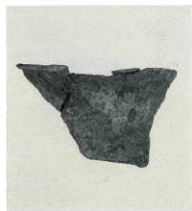
SH2 : 35



SH2 : 36



SH2 : 37



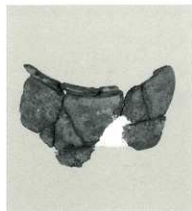
SH2 : 38



SH2 : 44



SH2 : 45



SH2 : 46



SH2 : 47



SH2 : 49



SH2 : 50



SH2 : 52



SH2 : 53



SH2 : 54



SH2 : 55



SH2 : 56



SH3 : 58



SH3 : 61



SH4 : 62



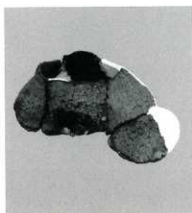
SH4 : 66



SH6 : 70



SH7 : 71



SH7 : 72



SH7 : 73



SH8 : 75



SH8 : 76



SH8 : 77



SH8 : 79



SH8 : 80



SH8 : 81



SH8 : 82



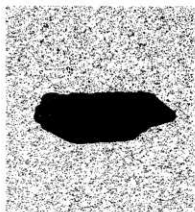
SH8 : 84



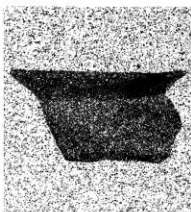
SH8 : 85



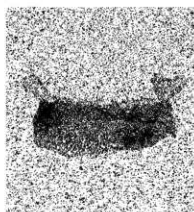
SH9 : 87



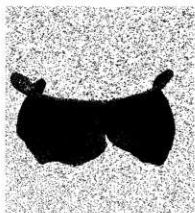
SH9 : 88



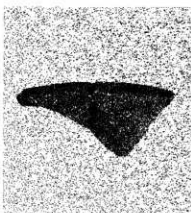
SH9 : 92



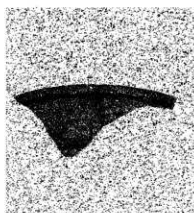
SH9 : 93



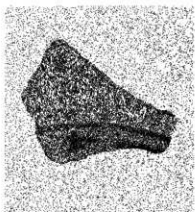
SH9 : 94



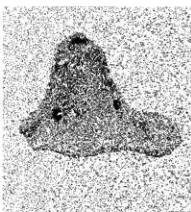
SH9 : 104



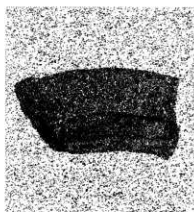
SH9 : 104



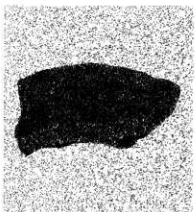
SH9 : 105



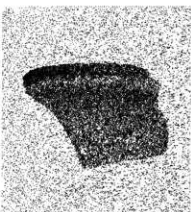
SH9 : 106



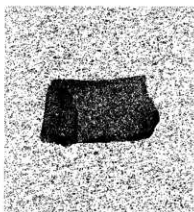
SH9 : 109 (外面)



SH9 : 109 (内面)



SH10 : 110



SH10 : 112



SH10 : 113



SH10 : 116



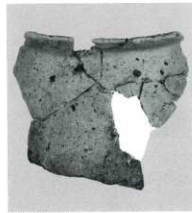
SH10 : 117



SH10 : 119



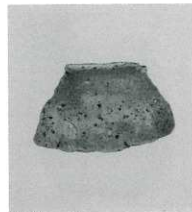
SH10 : 120



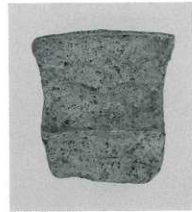
SH10 : 121



SH10 : 122



SH10 : 124



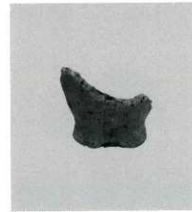
SH10 : 125



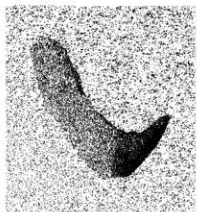
SH10 : 126



SH10 : 128



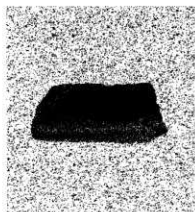
SH10 : 129



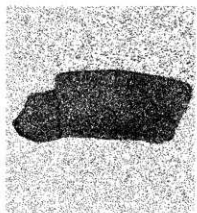
SH10 : 131



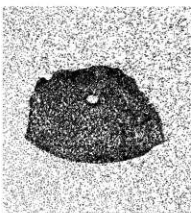
SH10 : 132



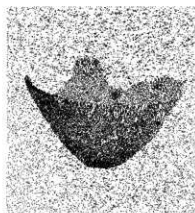
SH11 : 133



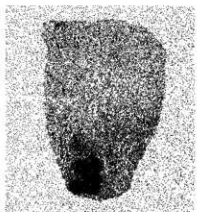
SH11 : 134



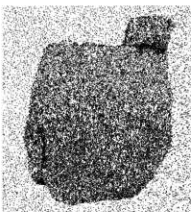
SH11 : 135



SH11 : 136



SH11 : 137



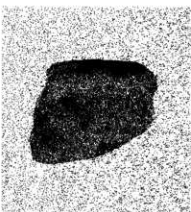
SH14 : 138



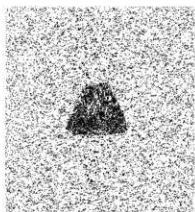
SH14 : 140



SH14 : 141



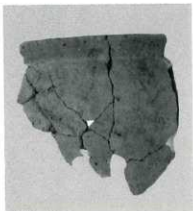
SH15 : 143



SH15 : 145



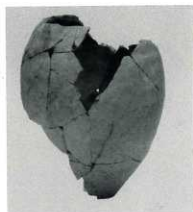
SH15 : 147



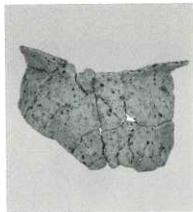
裏棺 : 148



裏棺 : 150



裏棺 : 151



包含層 : 153



包含層 : 158



包含層 : 160



包含層 : 161



包含層 : 163



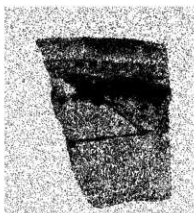
包含層 : 165



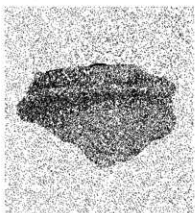
包含層 : 166



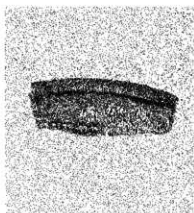
包含層 : 167



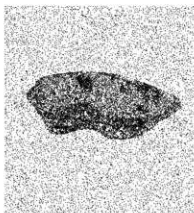
包含層：169



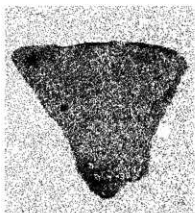
包含層：170



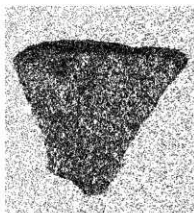
包含層：171



包含層：172



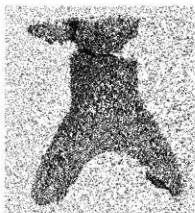
包含層：176



包含層：176B



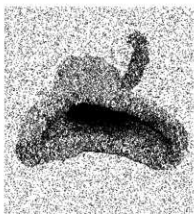
包含層：179



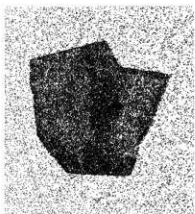
包含層：180a



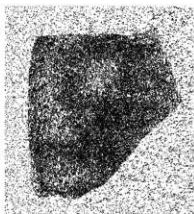
包含層：180b



包含層：180c



SH10：182



包含層G7区：183



SH10 : 184



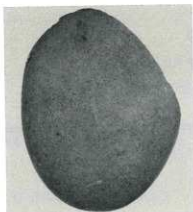
SH9 : 185



SH10 : 186



SH1 : 194



SH9 : 195



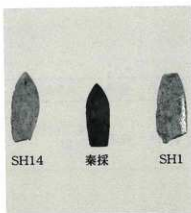
SH2 : 196



SH5 : 197



200 : (二次混入)

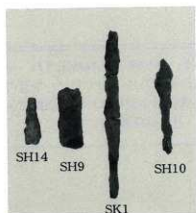


SH14

秦探

SH1

石鐵



SH14

SH9

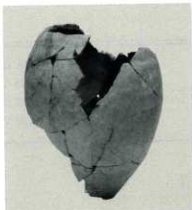
SH10

SK1

鉄器



149 : 甕棺



151 : 甕棺 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	おかいせきぐん かみつじいせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	岡遺跡群 上辻遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	第20集							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	小柳和宏、綿貫俊一							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地 TEL 097-597-5675							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かみつじ	おおいしおおあざにうあざかみつじ	市町村	遺跡番号	°	°			
上辻遺跡	大分市大字丹生字上辻	201	322361	33° 13' 24".18	131° 42' 27".75	131° 42' 27".75	2000㎡	代替グラウンド
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上辻遺跡	集落	弥生時代後期	住居跡15棟 甕棺1基	土器、刀子、石器				
要約	<p>上辻遺跡は丹生台地上にある小丘陵に立地した遺跡である。住居跡が15棟検出され、中から弥生時代後期後半の土器が出土した。住居址から姫島産の黒曜石は一切でず、少量の鉄器が出ている。また、器台や瀬戸内系の遺物が出ている。甕棺は小児棺で丘陵の裾部で1基だけ孤立した状況で出土している。木棺墓も一基検出され、刀子が副葬されていた。</p>							

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第20集

岡遺跡群上辻遺跡発掘調査報告書

平成19年(2007) 3月30日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

TEL (097) 597-5675

印刷 (有)印刷 良栄堂